The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	The Adventures of Acidman : Psychedelics and the Evolution of Consciousness in Science Fiction and Superhero Comics from the 1960s Onward
Author(s)	Garlington, Ian Stuart
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51851
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（Garlington, Ian Stuart）	
論文題名	The Adventures of Acidman: Psychedelics and the Evolution of Consciousness in Science Fiction and Superhero Comics from the 1960s Onward （アシッドマンの冒険：1960年代以降のSF小説とスーパーヒーロー・コミックスにおける サイケデリックと意識の進化）

本論文は、1960年代以降のアメリカのＳＦ小説やスーパーヒーロー・コミックスにおける、未来の人間の進化の表象に、ＬＳＤなどの幻覚剤が与えた影響について論じるものである。一般の読者にとって、幻覚剤と人間の進化、幻覚剤とスーパーヒーローはすぐには結びつかないだろうが、以下で示されるのは、ここ30年で現れてきた最も深い（そしてポピュラーな）スーパーヒーローの物語が、人間の未来についてのオカルト的、カウンターカルチャー的考えに基づくものであり、それらがアメリカ文化の中で一般的人気を得たのは、多くの場合、幻覚剤が当時の社会で受け入れられてきたことと重なり合うということである。本論文で取り上げている作品はすべて、モダニズム文学の技法を使っているが、その技法は個人の特有な意識を描写しようとするものであった。そして、この技法はＳＦとスーパーヒーローの文脈で、進化した、人間を超える意識を描写するために採用された。こうした傾向をスーパーヒーロー・コミックスの偉大な作家であるアラン・ムーアやグラント・モリソン、ＳＦ作家トマス・ディッシュ、ロバート・アントン・ウィルソンらの作品において検証することで、以下の議論は20世紀後半の芸術表象の不可能性という問題に対して、文学的サイケデリック美学がどのような新たな答えを提供しているのかを論じるものである。

スーパーヒーロー・コミックスの研究者の多くは、コミックスの文脈という限られた分野でスーパーヒーローの存在や文化的役割を解釈しようとするが、彼らが辿り着いた結論はムーアやモリソンが描いているポストモダン・スーパーヒーローの姿を十分把握していない。偉大なロシアのフォルマリスト、ヴぃクトル・シクロフスキーは「文学の遺産は父から息子ではなく、叔父から甥に伝わる」と述べている。この説に従えば、20世紀の物語形式におけるこの斜めの影響関係は、ジョイスからニュー・ウェーブ・ＳＦを経由して、ポストモダン・スーパーヒーロー・コミックスに至る線に見ることができ、これが一つの新たなジャンルを形作るになる。

本論文はこの影響関係を検証するものだが、そのためにはまず、メディアにおける幻覚剤についての固定観念を取り払う必要がある。たとえば、時代遅れになった現実逃避、あるいは、表象不可能なグローバル資本主義社会に対する無力感などが幻覚剤と結び付けられてきた。こうした固定観念を取り払うには、幻覚剤使用者が共有している美学観念と、ロマン主義に基づいた文学的伝統を結びつける必要がある。この伝統は「ブレイクから1968年へ」つながるもので、幻覚剤をアナキスト的な政治的立場と結び付ける。何故なら、幻覚剤の作用として我々が見慣れたものが突然見慣れない、新たなものとして立ち現われてくるということがある。この知覚の変容によって世界が違ったふうにとらえられる。と同時に、それまで何の疑いもなく受け入れていた様々な観念も変容を迫られることになる。物がまとっていたsymbolic meaning、つまり人間にとっての使用価値が引きはがされて、物自身が持つ物質的テクスチャーが前面に押し出されて、新たな意味を作り出すのである。こうした既成の価値観を壊し、新たな意味を作り出すという作用は、実は文学における異化作用と同じものなのだ。フレドリック・ジェイムソンが言うように、世界を違ったふうに見るために新たな器官が必要であることと、新たな物語を作り出すこととは同義である。

建築家であり哲学者でもあるバックミンスター・フラーは、生命全体としての過程を人間が認識するためには、現代の人間中心主義を支える物語を捨てなければならないと述べる。そしてそれに代わる物語形式として、元ハーバード大学教授であったティモシー・リアリーは、幻覚剤によって与えられたヴィジョンに基づくＳＦが、その役割を果たしていると主張する。この文脈で、ＳＦは単なる現実逃避の物語であることをやめて、生命としての人間が生き延びるための教育的役割を果たす。ロバート・アントン・ウィルソンの言葉を借りれば、「ＳＦの機能は人間の固定観念や常識を打ち壊すことである。ＳＦは解放だ。」

60年代の英国ニュー・ウェーブＳＦは、モダニズム文学の技法を再利用することによって、大衆娯楽であったＳＦの文化的地位をあげることを目指した。モダニズム以降の主流の文学では、あらゆる可能性が試されつくして、新しいものが生まれてこない状況にあったが、文学的伝統のないＳＦの分野では、これらの可能性は新たな試みとして受け入れられた。しかし、ニュー・ウェーブＳＦの中で最も有名な作家たち、たとえば、Ｊ・Ｇ・バラード、ブライア

ン・オールディス、マイケル・ムアコックらは、フラー、リアリー、ウィルソンらが想像したカウンターカルチャー的ユートピアを拒否し、文化的エントロピーによって社会変化が不可能になった悲観的世界を次々と描いた。それにもかかわらず、彼らの作品で採用されたモダニズム技法、たとえば異化作用が新たなヴィジョンを生み出していることははっきりと見て取ることができる。

以下の章では、進化した人間のヴィジョンを幻覚剤の影響のもとに知覚されたものとして記述するために、モダニズム文学の技法を使用した作品の、歴史的、文化的、テクスト分析を行う。第一章は、トマス・ディッシュの*Camp Concentration*（1968)を扱う。この作品は意識と無意識が融合した、人間を超えた意識を描写するニュー・ウェーブＳＦの代表作品である。この作品は最初、ムアコックが編集した*New Worlds*誌に、アルディス、バラード、ウルフなどの代表作家の作品とともに連載された。この作品では科学者が開発した新型梅毒に感染することによって、文学的天才が生み出されるのだが、この章では、テクスト分析を通してこの新型梅毒は幻覚剤のメタファーであることを論じ、また、文学的天才の生産は錬金術の時代から、60年代のカウンターカルチャーの時代に至るまで、人間の新たな可能性を模索する一連の流れの中に位置づけることができることを示した。

コミック作家アラン・ムーアとグラント・モリソンは、コミックスの伝統よりもこのニュー・ウェーブＳＦからの影響が大きかったと述べている。さらにムーアはピンチョンから、モリソンは同時代のロバート・アントン・ウィルソン、ロバート・シェイから影響を受けたと語っている。第二章では、このウィルソンとシェイの*Illuminatus!*三部作（1975 ）を取り上げて、作品の断片的形式が、彼らの幻覚剤経験によって得られた、未来の人類の「集合的意識」の様子を表していることを論じた。作品の主人公たちは、コスチュームを着た典型的なスーパーヒーローではないのだが、グラント・モリソンが定義する新たなスーパーヒーロー、すなわち、「多様で創造的な世界を作ろうとする神秘的能力を持った人物たち」なのである。第一章で取り上げたディッシュが、人工的な方法で進化した人間の意識を描写するために、様々なモダニズム文学の技法を採用したのと同様に、ウィルソンとシェイもジェームズ・ジョイスの*Finnegans Wake*の言葉遊びや、ウィリアム・バロウズのカットアップ技法を使って、読者に直線的時間と個人意識を超越した語りの経験を与えた。

*Illuminatus!*と*Camp Concentration*における断片的語りの形式が少数の批評家によって評価されたにも関わらず、大衆向け文学の読者にとっては難解なものであったため、この作品は世間から忘れられたままであった。残りの三章では、前二章で論じられた論点が、コミックスの世界でどのように引き継がれていったのかについて、詳細な分析を行った。商品化されたスーパーヒーロー・コミックスのジャンルで、内容や形式について論じる前に、経済的流通制度や編集者の思惑、検閲、国家のイデオロギーなどの要因が、内容にどのような影響を与えるのかを把握することが不可欠である。しかし、同時にコミックスという媒体が、散文形式よりも幻覚剤の影響のもとにある意識の変容を描写するのにすぐれているかどうかという問題も検討する必要がある。幻覚剤と創造力、またコミックスの絵における幻覚剤の影響についての研究は以前からあったが、コミックスという媒体に特有な時間と空間の関係という文脈での表現スタイルの研究はなかった。そのため第三章では、コミックス理論家であるスコット・マクラウドの方法を用いて、60年代、70年代の幻覚剤の影響を受けたアンダーグラウンド・コミックスを対象に、コマ間の推移を6つのタイプに分け、どのような頻度でそれらが現れるかを検証した。その結果、これらのコミックスの中に、特有な語りの構成が見られることがわかり、この構成を実験的な散文の技法と比較することによって、コミックスという媒体こそが、非直線的時間を表現するのにふさわしいということが明らかにされた。

第四章では焦点はスーパーヒーローのジャンルにおけるイデオロギーの歴史的考察に移る。フレドリック・ジェイムソンの「文化の再専有」という概念を用いると、スーパーヒーロー・ジャンルは、以前の時代の様々な民衆の物語形式を、資本主義社会における肯定的性質を称揚する物語に作り替えたものであることが分かる。さらにこの章では、出版形式が変わることによって、再びユートピアというテーマが導入されることになり、そのことによっていかにイデオロギー的スーパーヒーローが崩壊するかを検証した。この章の分析の箇所では、アラン・ムーアがスーパーヒーロー物語にユートピアを導入することによって、スーパーヒーロー物語の脱構築を行っていること、そしてその結果、読者の中にノスタルジーやクリシェを越えて、人類や進化についての深い哲学的考察に至る、オールタナティヴなスーパーヒーロー物語への要望を作り出したことを論じた。

第五章では、これまで述べてきたあらゆるテーマが含まれた作品として、グラント・モリソンの*The Invisibles*（1994-2000）を取り上げた。まず、時間と空間、また個人意識を超越するための道具としての幻覚剤のテーマが、この連載物語の形式においてどのように反映されているかを検証した。モリソンが、永遠に続く幻覚剤体験として表現している、未来の人類の集合的意識という超越的ユートピアは、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの、芸術的創造におけるカオスの役割と類似していると論じた。そしてこのことは、詩としてのコミックスというモリソンの主張に重ね合わせることができるということを考察した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　Garlington, Ian Stuart　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	片　渕　悦　久
	副 査　大阪大学　教授	服　部　典　之
	副 査　大阪大学　准教授	山　田　雄　三
	副 査　大阪大学　准教授	石　割　隆　喜

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： The Adventures of Acidman: Psychedelics and the Evolution of Consciousness in Science Fiction and Superhero Comics from the 1960s Onward

学位申請者　Garlington, Ian Stuart

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　片渕　悦久

副査　大阪大学教授　服部　典之

副査　大阪大学准教授　山田　雄三

副査　大阪大学准教授　石割　隆喜

【論文内容の要旨】

本論文は、1960 年代以降の SF 小説やスーパーヒーロー・コミックスに焦点を当て、そこに表現される人間の意識、またそれを人類の進化をめぐる物語へと編制していく概念化作業の過程に、LSD などの幻覚剤の使用体験がどのような影響を与えているのかという問題、さらにはそうした物語の概念化作業それ自体もまた物語内容に組み込まれていく点について、綿密な作品分析を施し、新たな読みを提示しようとする試みである。論文は英語で執筆され、序論、全 5 章からなる本論、および結論から構成されている。論文の分量は、後注と参考文献リストを含め全体で A4 判 160 ページ、図表等を除く本文の語数は約 36,000 語である。

序論では、幻覚剤の影響のもとに知覚される人間の進化についてのヴィジョンと、それを記述するためにモダニズム文学の技法に依拠した作品の歴史・文化的側面に注目する本論文の方法論的プロセスが提示されている。

第 1 章は、様々なモダニズム文学の技法を採用して、人工的な方法で進化した意識と無意識が融合した人間のありようを描写するニュー・ウェーブ SF 作家トマス・ディッシュの *Camp Concentration* を扱う。この章では、科学者が開発した新型梅毒への感染から文学的天才が生み出されるという物語内容を考察し、新型梅毒が幻覚剤のメタファーであること、また文学的天才の誕生が、錬金術の時代から 1960 年代のカウンターカルチャーの時代に至るまで、人間の新たな可能性を模索する芸術的系譜に位置づけることができると主張されている。

第 2 章では、ロバート・アントン・ウィルソンとロバート・シェイの *Illuminatus!*の断片的形式が、作者の幻覚剤使用経験によって得られた、未来の人類の「集合的意識」を示していると論じられる。またこの章では、ジェイムズ・ジョイスの *Finnegans Wake* における言葉遊びや、ウィリアム・バロウズのカットアップ技法をこの作品がたくみに再利用しており、そのことが読者に対する直線的時間と個人意識を超越した語りの経験の伝達、さらには神秘的能力をもった新たなスーパーヒーロー像の創造に貢献していると指摘されている。

第 3 章は、1960 年代以降のアンダーグラウンド・コミックスを対象とし、商業化されたスーパーヒーロー・コミックスのジャンルにおいて、経済的流通制度や編集者の思惑、検閲、国家のイデオロギーなどの要因が、物語内容にどのような影響を与えてきたか分析している。またコミックス媒体が幻覚剤の影響による意識の変容をどのように描写しているかについても考察を加えている。さらに、アンダーグラウンド・コミックスに特有な時間と空間の関係が、非直線的時間の表現にふさわしい語りの構造にもとづいたものであると主張している。

第 4 章では、コミックス作家アラン・ムーアの作品を取り上げ、フレドリック・ジェイムソンの「文化の再占

有」を概念的に援用し、文化的イデオロギー史の観点からスーパーヒーロー・ジャンルが、その登場以前の時代における様々な大衆的物語形式を、資本主義肯定の物語へ作り変えたものであることが論証される。さらに、出版形態の変化が促したユートピア的テーマのコミックス・ジャンルへの再導入が、スーパーヒーローの伝統的イメージの崩壊過程と哲学的省察の絡んだ新たな物語形成におよぼす影響について検証している。

第5章は、グラント・モリソンの *The Invisibles* を取り上げ、連載物語の形式において、時間と空間、また個人意識を超越するための道具としての幻覚剤使用経験が物語のテーマとしてどのように機能しているかを考察している。とりわけ本章では未来の人類の集合的意識こそがモリソンにとって永続的な幻覚剤体験が表現する超越的なユートピアのイメージにほかならないと述べられ、この点がジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリの主張する芸術的創造におけるカオスの役割と類似していることが喝破されている。

結論では、本論文全体の企図がまとめられ、幻覚剤についての固定観念を再考するために、幻覚剤体験者が共有する美学観念と、ロマンティシズム以降の文学的伝統、さらにはアナキストの政治的立場との結びつけをめざす、文化横断的な新たな意味作用の物語学を提案している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、トマス・ディッシュやロバート・アントン・ウィルソンら現代英米のＳＦ作家の小説や、アラン・ムーア、グラント・モリソンらのスーパーヒーロー・コミックス作品など、これまで英米文学研究においては十分に論じられてこなかった幻覚剤の使用体験の物語、人間の意識の進化を表象する物語、またそれらと文学的想像力との関係性に光を当て、先行研究の問題点を丹念に指摘し、独自の読みを明快に展開させた研究である。一見結びつきにくい幻覚剤と人間の進化の問題が1960年代以降のスーパーヒーローの物語における人間の未来についてのオカルト的、あるいはカウンターカルチャー的表象と連動しているという指摘、またSFやコミックスがアメリカ文化の中で一般的人気を得たのは、多くの場合幻覚剤が当時の社会で受け入れられていった過程と一致するという主張は深い洞察に富んだ見解であり、その点に本論文の独創性を認めることができる。とくに1960年代以降の英国ニュー・ウェーブSFやスーパーヒーロー・コミックスが個人の特有な意識を描写しようとするモダニズム文学の技法を取り入れており、そうした主流文学の技法的再利用がSFの文化的地位の向上に貢献しているという一連の考察は、あらゆる芸術的可能性が試し尽くされた状況にあったモダニズム以降の主流文学の問題点を逆照射することになり、20 世紀後半の芸術表象の不可能性に対して「文化的サイケデリック美学」がどのような応答可能性を示しているかを丹念に粘り強く探った分析とともに、これまでにない斬新な英米文学研究の方向性を示す研究としておおいに評価できるものである。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。たしかに、モダニズム文学とSFやコミックスとの間の影響関係を記述するため系譜学的視点を導入した点は、作品分析の一貫性を保つ論述的戦略であったと理解できる。しかし、ときに強引さをともなう包括的な考察のあり方が、鍵概念となる「文学的サイケデリック美学」の拡大解釈を招いてしまう部分が散見される。また、文学からSFやコミックスへの系譜学を提案する学問的必然性の問題に踏み込まないまま、幻覚剤体験を叙述する作家たちの個人的経験があたかも現代に生きる人間の普遍的な物語意識であるかのように単純化して結論づけている点については、物語という現象そのものに特化して論じるなど、さらなる考察の深化が求められる。

しかし、これらの点は本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。